

中国の現代史 ～解放から開放へ～

今回学ぶこと

中国では中華民国が成立した後も、戦火が続き安定しなかった。中国を侵略した日本が1945年に敗れた後、内戦を経て成立したのが社会主義による国づくりを目指した中華人民共和国であった。建国のリーダー毛沢東は、農業の集団化などを強引に行ったため、経済は混乱した。1980年代に次のリーダー鄧小平のもとで市場経済を取り入れ、高度経済成長を達成した。しかし、急激な発展の影で、環境破壊などの問題も山積するようになった。

調べておこう・覚えておこう

- 日本が中国を侵略した過程を調べ、年表にまとめてみよう。
- 中国の経済政策について、毛沢東時代と鄧小平時代の違いを、農業・工業・対外関係に分けて比較してみよう。
- 現在、中国が直面している社会問題を、新聞記事などから拾い出し、その歴史的な背景を考察してみよう。

中華人民共和国の誕生

世界恐慌の余波を受けた日本では、軍部が中国への侵略によって事態を打開しようとした。1931年に満州事変を起こして満州国を建国し、1937年に中国との全面戦争に突入した。

中国では蔣介石が率いる国民党と毛沢東が指導する共産党が手を結んで日本と戦ったが、日本敗戦後は2つの党のあいだで戦闘が始まる。抗日戦争を指導するなかで農村に勢力を拡大していた共産党は、政治的に腐敗が目立つようになった国民党軍を解体に追いやり、1949年に中華人民共和国の成立を宣言した。蔣介石の国民政府は台湾に逃れた。

毛沢東の文化大革命から鄧小平の改革開放へ

長く続いた戦争で経済の基盤が大きく傷ついた中国を、どのように立て直すのか、最高指導者

となった毛沢東は、社会主義に基づく国づくりを進めようとする。建国当初は、ソ連の協力を得て進めようとした。国際的には1950年に始まる朝鮮戦争ののち、ソ連とアメリカを軸とする冷戦が始まり、アメリカの脅威を感じていた毛沢東は、計画経済を取り入れ、農業生産を向上させ、その利益を工業に投資するという方向を模索した。しかし、ソ連の世界戦略が変化すると、毛沢東は独自の社会主義化の道を進むようになった。

1958年に「大躍進」と呼ばれる運動を展開し、市場経済を排して強引に農業の集団化を進め、自力で工業を発達させようとしたが、性急でずさんな計画だったため、経済建設は破綻した。当時、党の総書記であった鄧小平などは、市場経済を一部取り入れて、経済の立て直しを図った。しかし、「大躍進」の失敗で指導権を失っていた毛沢東は「文化大革命」という運動を起し、鄧小平などを失脚させた。1976年、毛沢東が死去すると鄧小平は最高指導者に復帰し、市場経済を導入する改革をすすめる、対外的に投資を呼び込む開放政策を採った。政治の民主化を求める運動が活発化すると、それを弾圧した（天安門事件）。民衆の不満を抑えるために、経済発展を加速し、中国は世界の工場とまでいわれるようになった。

経済成長と環境問題

1990年代から中国は「社会主義市場経済」を掲げ、共産党の一党支配を維持しながら、市場経済を積極的に導入した。農村から多くの労働者が工場で働くようになったため、生産コストが低く抑えられて安価な工場製品を世界に輸出することができた。さらに外資を導入して工場を建て、技術の獲得に努めた。経済は沿岸部から発達し、21世紀に入ると高速道路などを整備し、内陸部の発展を目指すようになった。しかし、開発を優先したため、大気汚染・水質悪化・土壌汚染など、深刻な環境問題を引き起こすようになった。先進的な環境法は整備されてはいるが、マスメディアの報道が規制されており、政府のチェックが十分ではなく、問題の解決にはいたっていない。近年では貧富の格差も広がり、労働力人口も減少に転じており、中国は大きな曲がり角にさしかかっている。

